

## 今帰仁方言の用言アクセントの起源について

LAWRENC, Wayne / ローレンス, ウェイン

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

41

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

23

(発行年 / Year)

2017-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014494>

# 今帰仁方言の用言アクセントの起源について

ウエイン・ローレンス

## 0. はじめに

今帰仁村字与那嶺の方言（以下 今帰仁方言とよぶ）は琉球諸方言のうちでは珍しく、声調のほかにアクセントがある（Lawrence 1990, 2001）。今帰仁方言のアクセントの最大の特徴は、アクセントが隣接する音節の高母音（/i, u/）の長母音化を阻止することである。（\* = アクセント, 「 = 音調の上昇, 〕 = 音調の下降）

- (1) a. si「zii〕mi /sizimi/ 「蜆」  
b. p<sup>h</sup>azi「cii /pazici/ 「入墨」  
c. jucii「mi /jucimi/ 「ゆとり」

(1)の三音節名詞で例示するように、偶数音節（正確には弱強型韻脚の主要部の軽音節）は長母音化するが、高母音の場合、隣接音節のアクセントはその長母音化を阻止する（1b）。このほかに、語末軽音節にアクセントがある場合、その母音は長母音化する。

複合名詞の場合、複合化する前の韻脚構造はそのまま保たれる。無標の場合、語末拍は韻律外にされ、これによって語末にあるアクセントは削除される。<sup>1</sup> 次に複合語アクセントは右端の韻律的な拍に付与される。高声調は最も語末に近いアクセントに付与されるほか、語頭韻脚の次の拍にも高声調が振られ、この拍が韻脚の初頭拍なら高声調は主要部に移動する。次の複合名詞の例（2b）では、hitimi「ti- の二音節目が短いのは、-mi- にアクセントがあるためである。<sup>2</sup>（H = 高声調, < > = 韻律外）

- (2) a. 
$$\begin{array}{c} \text{H} \quad \text{H} \qquad \qquad \qquad \text{H} \\ | \quad | \qquad \qquad \qquad / \quad \backslash \\ /pazici^*/+/seeku^*/ \rightarrow \langle pazi \rangle ci\text{-}see \langle ku \rangle \rightarrow \langle pazi \rangle ci\text{-}see \langle ku \rangle \text{ 「入墨を施す技術者」} \\ [p^hazi「tʒise:〕ku] \end{array}$$
- b. 
$$\begin{array}{c} \text{H} \quad \text{H} \qquad \qquad \qquad \text{H} \\ | \quad | \qquad \qquad \qquad / \quad \backslash \\ /sitimiti^*/+/?uci^*/ \rightarrow \langle hiti \rangle miti\text{-}hu \langle ci \rangle \rightarrow \langle hiti \rangle miti\text{-}hu \langle ci \rangle \text{ 「朝のうち」} \\ [çitimi「tiφu〕tʒi] \end{array}$$

-mi- にアクセントがあるが、このアクセントは高く発音されるのではなく、高音調は韻脚の主要部にある。この方言では、アクセントと高声調を別けて扱わなければならないの

である。<sup>3</sup> 基本的に一形態素に最大で一つのアクセントがあるが、複合語には複数のアクセントが可能でその最後のアクセントのみに高声調が付与される。

琉球方言の多くはアクセントの指定がなくても声調のみを使って記述できるが、今帰仁方言は声調のほかにアクセントもあるため、そのアクセントがどのようにして発生したのかが問題になる。Lawrence (2016) では今帰仁方言の単純名詞のアクセント体系を、アクセントのない語声調言語である北琉球祖語の体系から導き出す案を提唱したが、<sup>4</sup> 今帰仁方言の名詞のアクセントと動詞のアクセントとに大きな違いがある。今帰仁方言の動詞の諸活用形の多くにもアクセントがあるが、単純名詞の場合と違い、その語構造や母音の種類からそのアクセントの有無と位置は予測可能である。

本稿で紹介する今帰仁方言の動詞と形容詞の共時的分析は Lawrence (1990 : 110-132) に依拠している。その他の方言の複合動詞の音調の記述は2010年12月21日の第11回NINJALコロキアムで発表した「北琉球祖語の音調再建について」の一部を敷衍したものである。ここで提案する今帰仁方言の単純動詞のアクセントの起源に関する案は本稿で初めて発表するものである。

## 1. 単純動詞

今帰仁方言の単純動詞は音調で分類すれば、ごく少数の例外を除いて、二つの範疇に分類される。<sup>5</sup> 基本的には二拍目を含む音節から高くなる動詞 ([*-ex*] というラベルを付ける) と、語頭にある弱強型韻脚 (重音節一つか、軽音節二つか、軽音節とそれに続く重音節) に次ぐ二拍目を含む音節から高くなる動詞 ([*+ex*] と呼ぶ) があるが、動詞が短い場合はこの基本からずれることがある。

(3) [ <i>-ex</i> ] 動詞	[ <i>+ex</i> ] 動詞
nu[ <i>kuut<sup>h</sup>amaaru</i> ] <sub>N</sub> 「温まる」	?araat <sup>h</sup> a[ <i>miru</i> ] <sub>N</sub> 「改める」
hu[ <i>taageeru</i> ] <sub>N</sub> 「疑う」	haci[ <i>reeru</i> ] <sub>N</sub> 「誂える」
p <sup>h</sup> a[ <i>taaracu</i> ] <sub>N</sub> 「働く」	?iguuma[ <i>su</i> ] <sub>N</sub> 「予告する。せきたてる」
?a[ <i>gaaru</i> ] <sub>N</sub> 「上がる」	sagaa[ <i>ru</i> ] <sub>N</sub> 「下がる」
ha[ <i>cun</i> ] 「欠く」	hacu[ <i>N</i> ] 「書く」
[ <i>mun</i> ] 「盛る」	mu[ <i>N</i> ] 「漏る」

(3)にある動詞の終止形では、語尾 /*-iun*/ の前語末拍にアクセントがある (そのために ?araat<sup>h</sup>a[*miru*]<sub>N</sub> の四音節目が短い) が、語形が短い場合、そのアクセントが ha[*cun* のように音節末の *N* に移動したり、あるいは第一韻脚が韻律外になる [*+ex*] 動詞ではその第一韻脚にアクセントの付与をうけられない。このために hacu[*N* の例のように無アクセン

トになる動詞活用形がある。より純粋なアクセント表示を扱うために、本稿ではこのような二次的なアクセント変化をうけない長い動詞の活用形を利用してアクセントの分布を論じることにする。

次に掲げる動詞の活用は終止形が五音節の動詞である。ともに語根+*-tam-* という形態素からできている動詞であるが、音調の面では単純動詞と何ら区別はない。nu「kuut<sup>h</sup>amaaru」<sub>N</sub> は「温まる」の意で、ʔaraat<sup>h</sup>a「miru」<sub>N</sub> は「改める」であり、活用形は *NHJ* (685) に基づく。

	語幹	[-ex] 動詞	[+ex] 動詞
		/nuku-tam-ar-/ <sup>6</sup>	/ara-tam-er-/
[1]	志向形	nu「kuut <sup>h</sup> amaaraa	ʔaraat <sup>h</sup> a「miraa
[2]	未然形	nu「kuut <sup>h</sup> amaara」-ba	ʔaraat <sup>h</sup> a「mira」-ba
[3]	連体形 1	nu「kuut <sup>h</sup> amaaruu	ʔaraat <sup>h</sup> a「miruu
[4]	已然形 2	nu「kuut <sup>h</sup> amaari」-ba	ʔaraat <sup>h</sup> a「miri」-ba
[5]	已然形 2	nu「kuut <sup>h</sup> amaare」e	ʔaraat <sup>h</sup> a「mire」e
[6]	命令形 1	nu「kuu」t <sup>h</sup> amaari <sup>7</sup>	ʔaraat <sup>h</sup> a「mii」ri
[7]	命令形 2	nu「kuut <sup>h</sup> amaare」e	ʔaraat <sup>h</sup> a「mire」e
[8]	連用形	nu「kuut <sup>h</sup> amaari-gi」sen	ʔaraat <sup>h</sup> a「miiri-gi」sen
[9]	終止形	nu「kuut <sup>h</sup> amaaru」 <sub>N</sub>	ʔaraat <sup>h</sup> a「miru」 <sub>N</sub>
[10]	連体形 2	nu「kuut <sup>h</sup> amaaru」nu	ʔaraat <sup>h</sup> a「miru」nu
[11]	ゾの結び	nu「kuut <sup>h</sup> amaaru」ru	ʔaraat <sup>h</sup> a「miru」ru
[12]	継続志向形	nu「kuut <sup>h</sup> amaaruraa	ʔaraat <sup>h</sup> a「miruraa
[13]	カ of 結び	nu「kuut <sup>h</sup> amaaruraa」-ba	ʔaraat <sup>h</sup> a「miruraa」-ba
[14]	継続命令形 1	nu「kuut <sup>h</sup> amaaru」ri	ʔaraat <sup>h</sup> a「miru」ri
[15]	継続命令形 2	nu「kuut <sup>h</sup> amaarure」e	ʔaraat <sup>h</sup> a「mirure」e
[16]	中止形	nu「kuut <sup>h</sup> amaaru」i	ʔaraat <sup>h</sup> a「miru」i
[17]	尋問形	nu「kuut <sup>h</sup> amaaru」mi	ʔaraat <sup>h</sup> a「miru」mi
[18]	準体形	nu「kuut <sup>h</sup> amaaru」si	ʔaraat <sup>h</sup> a「miru」si
[19]	尾略形	nu「kuut <sup>h</sup> amaaru」-sa	ʔaraat <sup>h</sup> a「miru」-sa
[20]	継続接続形	nu「kuut <sup>h</sup> amaaru」ti	ʔaraat <sup>h</sup> a「miru」ti
[21]	継続過去 1	nu「kuut <sup>h</sup> amaaruta」 <sub>N</sub>	ʔaraat <sup>h</sup> a「miruta」 <sub>N</sub>
[22]	継続過去 2	nu「kuut <sup>h</sup> amaarute」 <sub>N</sub>	ʔaraat <sup>h</sup> a「mirute」 <sub>N</sub>
[23]	接続形	nu「kuu」t <sup>h</sup> amaati	ʔaraat <sup>h</sup> a「mii」ti
[24]	過去 1	nu「kuut <sup>h</sup> amaata」 <sub>N</sub>	ʔaraat <sup>h</sup> a「mita」 <sub>N</sub>

[25] 過去 2	nu[kuut <sup>h</sup> amaate]N	ʔaraat <sup>h</sup> a[mite]N
[26] 状態	nu[kuut <sup>h</sup> amaatu]N	ʔaraat <sup>h</sup> a[mitu]N
[27] 丁寧	nu[kuut <sup>h</sup> amaajabi]N	ʔaraat <sup>h</sup> a[mijabi]N

上の [1] 志向形の語尾はアクセントを持った <sup>\*</sup>a である。アクセントをもっているというのは、ʔaraat<sup>h</sup>a[miraa の四音節目の母音が長母音化しないことから判る。また、語末にあるアクセントを持った母音である故に、その母音が長母音化する。[2] 未然形の語尾は <sup>\*</sup>a-ba であり、この場合はアクセントを持った母音は語末にないために長母音化しない。[12] 継続志向形の語尾は、二つのアクセントをもった <sup>\*</sup>-iura<sup>\*</sup> である。最初のアクセントは ʔaraat<sup>h</sup>a[miruraa の四音節目の母音の長母音化を阻止するものであるが、このアクセント一つなら、<sup>\*</sup>ʔaraat<sup>h</sup>a[miru]raa になるはずである。二つ目のアクセントは語末母音の長母音化を引き起こして、<sup>8</sup> 高声調を語末まで引き付ける。

上の諸活用形をこれと同じ方式で分析していくと、アクセントは次の語尾表にあるように分布していることがわかる。

[1] <sup>*</sup> -a	[9] <sup>*</sup> -iun	[16] <sup>*</sup> -iui	[20] <sup>*</sup> -iute	[23] <sup>*</sup> -i <sup>*</sup> te <sup>9</sup>
[2] <sup>*</sup> -a-ba	[10] <sup>*</sup> -iunu	[17] <sup>*</sup> -iumi	[21] <sup>*</sup> -iuta <sup>*</sup> N	[24] <sup>*</sup> -i <sup>*</sup> ta <sup>*</sup> N
[3] <sup>*</sup> -u	[11] <sup>*</sup> -iuru	[18] <sup>*</sup> -iusi	[22] <sup>*</sup> -iuta <sup>*</sup> N	[25] <sup>*</sup> -i <sup>*</sup> te <sup>*</sup> N
[4] <sup>*</sup> -e-ba	[12] <sup>*</sup> -iura <sup>*</sup>	[19] <sup>*</sup> -iusa		[26] <sup>*</sup> -i <sup>*</sup> tu <sup>*</sup> N
[5] <sup>*</sup> -ee	[13] <sup>*</sup> -iura <sup>*</sup> -ba			[27] <sup>*</sup> -iabi <sup>*</sup> N <sup>10</sup>
[6] -e	[14] <sup>*</sup> -iure			
[7] <sup>*</sup> -ee	[15] <sup>*</sup> -iuree			
[8] -i				

二つのアクセントを持っている語尾は、実は [12] <sup>\*</sup>-iur<sup>\*</sup>-a<sup>\*</sup> や [21] <sup>\*</sup>-iur<sup>\*</sup>-i<sup>\*</sup>ta<sup>\*</sup>N のように複合語尾であって、<sup>11</sup> 一形態素に最多で一アクセントの原則に即している。

上の語尾表をみれば、アクセントの分布に規則性があるのに気づく。上の表でアクセントを持っていない語尾は <sup>\*</sup>-te [20, 23], <sup>\*</sup>-e [6, 14] と <sup>\*</sup>-i [8] であり、すべて前舌母音を含む拍である。動詞語尾の前舌母音はアクセントを付与されないといえそうである。<sup>\*</sup>-ee [5, 7, 15] の場合は、二拍の語尾の一拍目にアクセントが付与されると考えられる。

一拍語尾でアクセントをもっているのは <sup>\*</sup>-a [1] と <sup>\*</sup>-u [3] である。動詞語尾の後舌母音はアクセントが付与されるようである。これに対する例外のようにみえる無アクセントの後舌母音を含む語末拍は [2, 4, 13] <sup>\*</sup>-ba, [10] <sup>\*</sup>-nu, [11] <sup>\*</sup>-ru と [19] <sup>\*</sup>-sa である。NHJ (644) では [19] <sup>\*</sup>-sa は終助詞として、そして [2, 4, 13] <sup>\*</sup>-ba は接続助詞 (NHJ 639, 640, 643) と

して扱われている。この二つの語尾は助詞であるがために、アクセントを付与されないと考えられる。-nu で終る [10] 連体形2は体言を修飾する働きしかない。<sup>12</sup> そして -ru で終る [11] は係助詞 -du ~ -ru の結びである。連体形2の -nu が共時的に体言を修飾する格助詞 -nu と同じ形態素であるとするれば、そして係助詞の結びである -ru が共時的に係りである -du ~ -ru と同一の形態素であるとするれば、アクセントがないのは説明できる。

今帰仁方言の単純動詞活用形のアクセント分布は(4)の二つの規則によって捉えられる。

- (4) a.  $V ]_{\text{動詞語尾}} \rightarrow \overset{*}{V}$                       b.  $\mu \mu ] \rightarrow \overset{*}{\mu} \mu ]$   
           [後舌]

だが、これをいくらか簡略化できるのである。複合名詞の無標の場合には語末拍が韻律外になり、アクセントは右端の韻律的な拍に付与される。動詞の場合もこれと同じであれば、(4b) は  $\dots \mu \mu \rightarrow \dots \mu <\mu> \rightarrow \dots \overset{*}{\mu} <\mu>$  になるが、このプロセスの各段階は特に指定する必要はない。(4a) では語末拍にアクセントが付与されることから、この拍は韻律外にされていないことになる。(4a) を次の(5)に替えれば、語末の後舌母音は一般規則による右端の韻律的拍へのアクセント付与をうける。

- (5)  $V ]_{\text{動詞語尾}} \rightarrow [- \text{韻律外}]$   
           [後舌]

[12]  $\overset{*}{iur}\overset{*}{a}$ などの複合語尾にアクセントが二つあるのは、語尾の付加および音韻規則が循環的に適用することによる。

注5の例外的な動詞を除いて、単純動詞はアクセントがあれば、そのアクセントは語尾にあって、動詞語幹には語頭韻脚の韻律外性 ([±ex]) の指定があって、アクセントはない。

徳之島浅間方言 (上野 2001) や与論島麦屋東方言 (上野 1999) の動詞活用形に、今帰仁方言に見るような母音の調音点や活用語尾の長さによる音調の違いはみられない。では、今帰仁方言のこの特徴はどこから生じたであろうか。これに関して、与那嶺の西隣に位置する諸志集落しよしの方言は示唆的である。島袋 (1975: 49, 50) に次の諸志方言の動詞の活用形資料がある (ハイフンは出典のまま)。

	[-ex] 動詞		[+ex] 動詞	
語幹	/patarak-/	/japara-k-er-/	/ʔururuk-/	/ʔarawa-r-er-/
[1] 志向形	p <sup>h</sup> a[ tarakaa	ja[ parakiraa	ʔururu[ kaa	ʔarawa[ riraa

[2] 未然形	p <sup>h</sup> a[taa]raka-ba	ja[paa]rakira-ba	?ururu[kaa]-ba	?arawa[rira]-ba
[3] 禁止形	p <sup>h</sup> a[taa]raku-na	ja[paa]rakiru-na	?ururu[cuu]-na	?arawa[riru]-na
[4] 已然形	p <sup>h</sup> a[taa]raki-ba	ja[paa]rakiri-ba	?ururu[kii]-ba	?arawa[riri]-ba
[6] 第一命令形	p <sup>h</sup> a[taa]raki-ba	ja[paa]rakiri-ba	?ururu[kii]-ba	?arawa[riri]-ba
[7] 第二命令形	p <sup>h</sup> a[taake]e	ja[parakire]e	?ururu[ke]e	?arawa[rire]e
[8] 連用形	p <sup>h</sup> a[taa]raci-ga	ja[paa]rakiri-ga	?ururu[cii]-ga	?arawa[riri]-ga
[9] 終止形	p <sup>h</sup> a[taa]racuN	ja[paa]rakiruN	?ururu[cu]N	?arawa[riru]N
[10] 連体形	p <sup>h</sup> a[taa]racu-nu	ja[paa]rakiru-nu	?ururu[cuu]-nu	?arawa[riru]-nu
[11] ズの結び	p <sup>h</sup> a[taa]racu-ru	ja[paa]rakiru-ru	?ururu[cuu]-ru	?arawa[riru]-ru
[13] カの結び	p <sup>h</sup> a[taa]racu-ra	ja[paa]rakiru-ra	?ururu[cuu]-ra	?arawa[riru]-ra
[18] 準連体形	p <sup>h</sup> a[taa]racu-si	ja[paa]rakiru-si	?ururu[cuu]-si	?arawa[riru]-si

[-ex] 動詞 (p<sup>h</sup>a[taa]racuN 「働く」, ja[paa]rakiruN 「柔らかくする」) の活用をまず見てみよう。基本的に二拍目に高声調があり、この拍が軽音節なら、長母音化する。似た現象が単純名詞にもみられる。単純名詞の基本的な音調パターンは次のとおりである (島袋 1975 : 17, 18)。

k <sup>h</sup> i[buu]si /kebusi <sup>*</sup> 「煙」	muka[zi /mukazi <sup>*</sup> 「百足」	kuru[maa /k <sup>2</sup> uruma <sup>*</sup> 「車」
ja[guu]sami /jagusami <sup>*</sup> 「寡婦」	hata[bi]ca /?atabica <sup>*</sup> 「蛙」	p <sup>h</sup> ukusi[mii /pukusimi <sup>*</sup> 「埃」

kuru[maa 「車」 と muka[zi 「百足」 とを区別するために、アクセントを想定する。アクセントを持った語末軽音節 (/k<sup>2</sup>uruma<sup>\*</sup>/, /pukusimi<sup>\*</sup>/) と二拍目 (あるいは偶数音節) の軽音節 (/kebusi<sup>\*</sup> /, /jagusami<sup>\*</sup>/) のみが長母音化すると考えられる。このことから、[-ex] 動詞の二拍目にアクセントがある (/patarak-/ , /japara-k-er-/ など) と考えられる。[1] と [7] の活用形のみはアクセントを持った二拍目を含む音節は長母音になっておらず、また、この二活用形は高声調が語末に向かって拡散 (spread) している。次の [-ex] 動詞の終止形の中にも同じパターンが観察される。

(6) [-ex] 動詞	[+ex] 動詞
ja[paa]rakiruN 「柔らかくする」	?arata[miru]N 「改める」
hu[tageeru]N 「疑う」	haci[reeru]N 「誂える」
p <sup>h</sup> a[taa]racuN 「働く」	?iguma[su]N 「せきたてる」
?a[gaa]ruN 「上がる」	saga[ru]N 「下がる」
ha[cu]N 「欠く」	hacu[N] 「書く」

「mu】<sub>N</sub>「盛る」

mu【<sub>N</sub>「漏る」

(6)の hu【tageeru】<sub>N</sub> は第二拍（を含む音節）から高いため [-ex] 型動詞であるが、他の(6)にある動詞と違って、(ア)高声調は前語末拍まで拡散しており、(イ)高声調を持った二拍目を含む音節の母音は短母音である。なぜこの動詞がこうなっているかという、それは三拍目以降に長母音があるからである。<sup>13</sup>

[1] と [7] の活用語尾はそれぞれアクセントを持った /-a<sup>\*</sup>/ と /-ee<sup>\*</sup>/ であると思われる。/-a<sup>\*</sup>/ の場合は語末にアクセントがある故に、長母音化をうける。[-ex] 動詞は二拍目にアクセントが付与され、もしその拍が軽音節なら、それが長母音化する。三拍目以降に長母音かアクセントがある場合、二拍目から高声調がその拍まで拡散し、二拍目を含む音節の母音が短母音化する。<sup>14</sup> 一語に複数のアクセントがある場合、最後のアクセント以外のは削除されると解釈できる。

次に [+ex] 動詞 (ʔururu【cu】<sub>N</sub>「驚く」、ʔarawa【riru】<sub>N</sub>「現れる」) を見てみる。[1] はアクセントをもった語尾 /-a<sup>\*</sup>/ で、その他の語形は前語末拍にアクセントが付与されている。高声調は四拍目（語頭の [+ex] になっている韻脚を跳ばして、その次の二拍目）に結合し、その四拍目にアクセントがあれば、長母音化によって軽音節は重音節になる。

以上を整理すると、諸志方言の韻律構造を生成する過程は下記のようにまとめられよう。

- (a) [-ex] の場合、アクセントを二拍目に付与する  
[+ex] の場合、アクセントを前語末拍に付与する
- (b) [-ex] の場合、高声調を二拍目に付与する  
[+ex] の場合、高声調を四拍目に付与する
- (c) アクセントをもった (i) 偶数音節、及び (ii) 語末音節の軽音節を長母音化する<sup>15</sup>
- (d) 三拍目以降に長母音かアクセントがある場合、高声調をアクセントまで、アクセントがなければ、前語末音節まで拡散する
- (e) 第二拍を含む音節が拡散していない高声調をもっていなければ、その音節の長母音を短母音化する

諸志方言では動詞活用語尾 [1] -a<sup>\*</sup> と [7] -ee<sup>\*</sup> は基底でアクセントを持っているとしているが、それは何故であろうか。この二つのアクセントは本来イントネーションに遡るのではないかと考えられる。[7] の第二命令形語尾は、命令形でも、もし今婦仁方言と機能が同じなら、無アクセントの [6] の第一命令形より「ややぞんざいな言い方」（仲宗根 1987 [1985]: 156) である。「ぞんざいな言い方」の命令が強い命令なら、語末音節の音調の下降はその強さに寄与するために生じたと思われる。[1] の語尾は志向形で、「私は字を書こう」

(NHJ 683) や「いっしょみんな行って働こう」(NHJ 390L) などのように、裸の形で志向をあらわす。意志(すなわち積極的な心の働き)も強い命令と同じように文末に独特のイントネーションを伴うようになって、<sup>16</sup> これがアクセントという義務的なものとして解釈されるようになったと考えられる。

諸志方言の一類対応動詞([-ex] 動詞)は二拍目に、二・三類対応動詞([+ex] 動詞)は前語末拍にアクセントが付与される。これは琉球祖語の音調を反映する音調であると思われる。一類対応動詞は明らかにA系列語彙で、ローレンス(2009)では北琉球祖語のA系列名詞は語頭の二拍が高いと論じた。また、同論考ではC系列名詞は語末の二拍が高いとも論じている。二・三類対応の動詞がC系列であれば、諸志方言の音調はうなづける。ちなみに、与論島麦屋東方言の二・三類対応動詞はC系列名詞と同じ語末二拍が高い。今帰仁方言では、二・三類対応動詞だけでなく、一類対応動詞もアクセントは語末寄り(二拍語尾の一拍目)に付与される。数でいうと、二・三類対応動詞の方が一類対応動詞より多いことから無標であると考えられ、そのために今帰仁方言では、本来二・三類対応動詞だけに適用していたアクセント付与規則が少数派である一類対応動詞にも適用するようになったと思われる。

## 2. 複合動詞

本節では動詞+動詞の複合語(複合動詞と呼ぶ)の音調を考察する。今帰仁方言の複合動詞は単純動詞と同じように[-ex](二拍目を含む音節から高い)と[+ex](二つ目の韻脚の二拍目目から高い)の二種の動詞がある。[-ex]動詞の先部成素の場合(7a)、その複合語は[-ex]の単純動詞と音調の面では区別されない。しかし、前部成素が[+ex]動詞の場合(7b)、単純動詞に見られない音調型が現れる。

- |        |  |   |  |
|--------|--|---|--|
| (7) a. | 「kee-ciraasu」 <sub>N</sub>                   | ← 「ke <sub>N</sub> 「食う」                     | + ci「raasu」 <sub>N</sub> 「散らす」               |
|        | 「ninbi-siziru」 <sub>N</sub>                  | ← 「ninbi」 <sub>N</sub> 「眠る」                 | + sizii「ru」 <sub>N</sub> 「すぎる」               |
|        | p <sup>h</sup> i「siizi-tubaasu」 <sub>N</sub> | ← p <sup>h</sup> i「siizu」 <sub>N</sub> 「殴る」 | + t <sup>h</sup> u「baasu」 <sub>N</sub> 「飛ばす」 |
| b.     | ʔabi-「ʔu」durukaasun                          | ← ʔabi「ru」 <sub>N</sub> 「叫ぶ」                | + ʔuduuru「kaasu」 <sub>N</sub> 「驚かす」          |
|        | t <sup>h</sup> ataa「ci-ku」rusun              | ← t <sup>h</sup> ataa「cu」 <sub>N</sub> 「叩く」 | + k <sup>h</sup> u「rusu」 <sub>N</sub> 「殴る」   |
|        | hacira「si-ke」esun                            | ← hacira「su」 <sub>N</sub> 「熱くする」            | + k <sup>h</sup> ee「su」 <sub>N</sub> 「返す」    |

[+ex]動詞で始まる複合動詞の高音調は後部成素の一拍目のアクセント(このアクセントのためにʔabi-「ʔu」durukaasunの四音節目が長母音化しない)までであって、そのあとは低く続く。これは終止形だけでなく、すべての活用形でもそうである。

この二つの型を(7)のように図式化できる。(F = 韻脚, μ = 拍, < > = 韻律外)

- (7') a. 

--

 + 

--
- b. 

< F >
-------

 + 

μ
---

[+ex] の複合動詞のいくつかのものに、単純動詞と同じ音調の型の交替形がある(8)。

- (8) 複合動詞ア          単純動詞ア
- p<sup>h</sup>ici-ju]sirUN ~ p<sup>h</sup>ici-ju]siru]N ← p<sup>h</sup>i]cuN 「引く」 + ju]siru]N 「寄せる」
- t<sup>h</sup>aci-]nu]cuN ~ t<sup>h</sup>aci-nu]cu]N ← t<sup>h</sup>acu]N 「立つ」 + nu]cuN 「退く」
- ʔumi-]t<sup>h</sup>a]cuN ~ ʔumi-t<sup>h</sup>a]cu]N ← ʔumi]N 「思う」 + t<sup>h</sup>acu]N 「立つ」

今帰仁村諸志方言（島袋 1975）の複合動詞は(9)のようで、[-ex] 動詞の先部成素のもの(9a) は単純動詞(6)と同様、二拍目にアクセントが付与されるが、[+ex] 動詞(9b) は今帰仁方言（すなわち与那嶺方言）と同じ型になる。

- (9) a. ]muN]-kurusUN ← mu]mi]N 「揉む」 + k<sup>h</sup>u]ruu]suN 「殺す」
- si]ke]p<sup>h</sup>inarasUN ← si]ke]N 「使う」 + p<sup>h</sup>i]naa]rasUN 「減らす」
- pi]cii]-ʔizasUN ← pi]cu]N 「引く」 + ʔiza]su]N 「出す」
- b. ʔabi-]ʔu]rurukasUN ← ʔabi]ru]N 「叫ぶ」 + ʔururu]kasu]N 「驚かす」
- t<sup>h</sup>ata]ci-ku]min<sup>17</sup> ← t<sup>h</sup>ata]cu]N 「叩く」 + -kumin 「込む」
- hacira]si-ke]esUN ← hacira]su]N 「温める」 + k<sup>h</sup>ee]su]N 「返す」

(9)を図式化すると(9') のようになる。

- (9') a. 

F
---

 + 

--
- b. 

< F >
-------

 + 

μ
---

徳之島浅間方言（上野 2004）では、今帰仁方言の [-ex] 動詞に対応する動詞（金田一語類でいう一類動詞）で始まる複合動詞は、一類対応の単純動詞と同じ音調型になる(10a)。一方、今帰仁方言の [+ex] 動詞に対応する動詞（金田一語類でいう二・三類動詞）で始まる複合動詞は、単純動詞と違って、語末音節が低くなり、先部成素の長さによって後部成

素の第一音節か、その次の音節が高くなる音調型になる (10b)。

- (10) a. 「k<sup>h</sup>asjanë-noosjun ← 「k<sup>h</sup>asjanëjun 「重ねる」 + noosju<sub>N</sub> 「直す」  
「hurui-hant<sup>h</sup>usjun ← 「huru<sub>N</sub> 「振るう」 + hant<sup>h</sup>u<sub>N</sub> 「落とす」  
「t<sup>h</sup>ubi-sjagajun ← 「t<sup>h</sup>ubjun 「飛ぶ」 + sjagaju<sub>N</sub> 「下がる」  
「si-ʔagajun ← 「sjun 「する」 + 「ʔagajun 「上がる」
- b. k<sup>h</sup>aaziri-「han」t<sup>h</sup>usjun ← k<sup>h</sup>aazi<sub>N</sub> 「引っ掻く」 + hant<sup>h</sup>u<sub>N</sub> 「落とす」  
kiri-han「t<sup>h</sup>u」sjun ← kiju<sub>N</sub> 「切る」 + hant<sup>h</sup>u<sub>N</sub> 「落とす」  
siri-haa「zi」mijun ← siju<sub>N</sub> 「干る」 + 「hazimijun 「始める」  
t<sup>h</sup>asiki-「ʔoo」jun ← t<sup>h</sup>asiki<sub>N</sub> 「助ける」 + 「ʔoojun 「合う」  
sirabi-「noo」sjun ← sirabi<sub>N</sub> 「調べる」 + noosju<sub>N</sub> 「直す」  
t<sup>h</sup>aaki-「ʔii」rijun ← t<sup>h</sup>aakju<sub>N</sub> 「叩く」 + 「ʔirijun 「入れる」  
nagi-t<sup>h</sup>uu「ba」sjun ← nagiju<sub>N</sub> 「投げる」 + 「t<sup>h</sup>ubasjun 「飛ばす」  
nii-sjaa「gi」jun ← nju<sub>N</sub> 「見る」 + sjagiju<sub>N</sub> 「下げる」

以上の浅間方言の複合動詞の音調型を (10') の形で図式化できる。(σ = 音節)

- (10') a. 

--

 + 

--
- b. 

<i>F</i>
----------

 + 

<i>F</i> $\bar{\mu}$
----------------------
- |                     |
|---------------------|
| <i>F</i> $\mu(\mu)$ |
|---------------------|

 + 

$\bar{\sigma}$
----------------

ローレンス (2016: 2-3) は浅間方言の複合名詞の音調の上昇の位置を次のように記述した。複合語の左端にある最大の韻律単位 (拍か韻脚) を韻律外にする。新しく左端にあられた最大の韻律単位 (拍か韻脚) をとばして、高音調をその次の韻脚の初頭音節に付与する。<sup>18</sup> これは (10b) の複合動詞の高音調の位置をも捉える記述である。

(10b) の例はすべて、高声調がどこに現れるかにも関わらず、後部成素の第一音節が重音節でなければ、その母音が長母音化する。Lawrence (2016) は単純名詞に関して、浅間方言の長母音の多くは北琉球祖語の音調の変わり目に対応すると推測したが、複合動詞の場合も、古くは後部成素の初頭音節に高声調があり、今の浅間方言の kiri-han「t<sup>h</sup>u」sjun 「切り落とす」のような例の高声調の位置は改新であると思われる。

なお、今帰仁方言と同じように、浅間方言では複合動詞の先部成素が二・三類対応の動

詞の場合、複合語音調と単純動詞音調との間に若干のゆれが認められる。次の例は上野 (2004 : 18, 33, 38) に拠る。

- (11) 複合動詞音調      単純動詞音調  
 judi-ʔaa[ga]j<sub>JUN</sub> ~ judi-ʔaga[j<sub>JUN</sub> ← judiju[<sub>N</sub>「茹でる」 + ʔagaj<sub>JUN</sub>「上がる」  
 ʔirabi-[zjaa]s<sub>SUN</sub> ~ ʔirabizja[s<sub>JUN</sub> ← ʔirabju[<sub>N</sub>「選ぶ」 + ʔizjasju[<sub>N</sub>「出す」  
 noi-[c̥i]kij<sub>JUN</sub><sup>19</sup> ~ noi-ciki[j<sub>JUN</sub> ← nooju[<sub>N</sub>「縫う」 + cikiju[<sub>N</sub>「付ける」

与論島麦屋東方言 (菊・高橋 2005) では、中平音調 (語頭の位置の ʔ で表記) の動詞 (一類対応) が先部成素になるとき、その複合動詞の音調は単純動詞の音調の中平ではなく、語末二拍が高くなる (12a)。これは二・三類の単純動詞の音調である。複合動詞の先部成素が二・三類対応の動詞の場合、その複合動詞は後部成素の頭から高くなるという音調型になる (12b)。

- (12) a. hataree-oo[s<sub>JUN</sub> ← ʔhataren「語らう」 + oo[s<sub>JUN</sub>「合わせる」  
 hataree-pu[r<sub>JUN</sub> ← ʔhataren「語らう」 + ʔpur<sub>JUN</sub>「惚れる」  
 musii-tagu[j<sub>JUN</sub> ← ʔmus<sub>JUN</sub>「巻る」 + tagu[j<sub>JUN</sub>「手繰る」  
 mugee-pazi[m<sub>JUN</sub> ← ʔmugeej<sub>JUN</sub>「動く」 + ʔpazim<sub>JUN</sub>「始める」  
 b. paree-[mudus<sub>JUN</sub> ← pa[ren「払う」 + mudu[s<sub>JUN</sub>「戻す」  
 haragi-[cikj<sub>JUN</sub> ← hara[g<sub>JUN</sub>「からげる」 + ci[k<sub>JUN</sub>「付ける」  
 jabui-[sitj<sub>JUN</sub> ← jabu[j<sub>JUN</sub>「破る」 + ʔsitj<sub>JUN</sub>「捨てる」

これは (12') のように図式化できる。

- (12') a. 

	+	μ μ
--	---	-----

  
 b. 

	+	
--	---	--

今帰仁方言と浅間方言と同じように、複合動詞の先部成素が二・三類対応の動詞の場合、複合語音調と単純動詞音調との間にゆれがみられる。注記された例を除き、次の例は上野 (1999 : 7) による。

## (13) 複合動詞音調 単純動詞音調

- hui- $\lceil$ magajun  $\sim$  hui-maga $\lceil$ jun  $\leftarrow$  hu $\lceil$ jun 「折る」 +  $\lceil$ magajun 「曲がる」  
 sit- $\lceil$ tubasjun  $\sim$  sit-tuba $\lceil$ sjun<sup>20</sup>  $\leftarrow$  si $\lceil$ jun 「蹴る」 +  $\lceil$ tubasjun 「飛ばす」  
 jun- $\lceil$ macigen  $\sim$  jun-maci $\lceil$ gen<sup>21</sup>  $\leftarrow$  ju $\lceil$ jun 「言う」 + maci $\lceil$ gen 「間違う」

伊江島方言（生塩 1985：72-3；2009）では一類対応の単純動詞は第二拍に高声調が付与され、そのあとは低く発音される。二・三類対応の単純動詞は語末から数えて二拍目に高声調が付与され、語末拍は低い。複合動詞の場合は、一類対応動詞が先部成素のものは、一類対応の単純動詞と同じ音調型になる（14a）。対して、先部成素が二・三類対応の動詞の場合、複合動詞の後部成素の一拍目に高声調が付与される（14b）。

- (14) a. p<sup>h</sup>ui $\lceil$ -migurasjun  $\leftarrow$  p<sup>h</sup>uju $\lceil$ N 「振る」 + migu $\lceil$ rasjun 「回らせる」  
 ŝika $\lceil$ i-tubasjun  $\leftarrow$  ŝika $\lceil$ jun 「使う」 + tuba $\lceil$ sjun 「飛ばす」  
 ŝika $\lceil$ i-teesjun  $\leftarrow$  ŝika $\lceil$ jun 「使う」 + t<sup>h</sup>eesju $\lceil$ N 「浪費する」  
 b. tataci-ku $\lceil$ rusjun  $\leftarrow$  tatacju $\lceil$ N 「叩く」 + huru $\lceil$ sjun 「痛めつける」  
 nii-nu $\lceil$ garasjun  $\leftarrow$  nju $\lceil$ N 「見る」 + nugarasju $\lceil$ N 「逃す」  
 ŝikui-ja $\lceil$ ndasjun  $\leftarrow$  ŝikuju $\lceil$ N 「作る」 + jandasju $\lceil$ N 「作り損なう」

これは（14'）のように図式化できる。

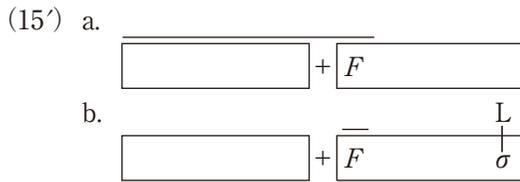
- (14') a.  $\overline{F}$   $\boxed{\quad}$  +  $\boxed{\quad}$   
 b.  $\boxed{\quad}$  +  $\overline{\mu}$   $\boxed{\quad}$

那覇方言（内間・野原 2006）では、先部成素が高起（一類対応）の動詞の場合、複合動詞は一類対応の単純動詞と同じ音調型をとるようである（15a）。<sup>22</sup> 先部成素が低起（二・三類対応）の動詞の場合、基本的にその複合動詞の後部成素の初頭韻脚のみが高いが、語末音節が低いという指定の方が優先されるので、後部成素が短い場合は、語末音節に押されて高く発音される単位は一韻脚より短くなることもある（15b）。

- (15) a.  $\lceil$ hik-katan $\lceil$ cjun  $\leftarrow$   $\lceil$ hicjun 「引く」 + katan $\lceil$ cjun 「傾く」  
 $\lceil$ ?ii-ciku $\lceil$ naasun  $\leftarrow$   $\lceil$ ?iin 「言う」 + ?<sup>23</sup>  
 $\lceil$ ?ii-hiru $\lceil$ giin  $\leftarrow$   $\lceil$ ?iin 「言う」 +  $\lceil$ hirugiin 「広げる」

「?ii-nuku」 <sub>SUN</sub>	← 「?ii <sub>N</sub> 「言う」	+ nuku「 <sub>SUN</sub> 「残す」
「ninzi-huri <sub>IN</sub>	← 「ninzi <sub>JUN</sub> 「眠る」	+ 「huri <sub>IN</sub> 「気がふれる」
「saci-ci <sub>IN</sub>	← 「saci <sub>JUN</sub> 「咲く」	+ ci <sub>IN</sub> 「切る」
b. sunci-「kee」 <sub>rasun</sub>	← sun「 <sub>CUN</sub> 「引きずる」	+ keera「 <sub>SUN</sub> 「ひっくり返す」
?abii-「?uru」 <sub>rukasun</sub>	← ?abii「 <sub>N</sub> 「叫ぶ」	+ ?ururuka「 <sub>SUN</sub> 「驚かす」
simi-「kuru」 <sub>SUN</sub>	← simii「 <sub>N</sub> 「攻める」	+ 「kurusun「殺す」
taci-「nka」 <sub>IN</sub>	← ta「 <sub>CJUN</sub> 「立つ」	+ 「nkai <sub>IN</sub> 「向かう」
simi-「ju」 <sub>si<sub>IN</sub></sub>	← simii「 <sub>N</sub> 「攻める」	+ 「jusi <sub>IN</sub> 「寄せる」
mii-「?N」 <sub>zi<sub>IN</sub></sub>	← mii「 <sub>N</sub> 「生える」	+ ?Nzi <sub>IN</sub> 「出る」
nai-「ci」 <sub>IN</sub>	← na「 <sub>IN</sub> 「なる」	+ ci <sub>IN</sub> 「切る」

以上の例は (15') のように図式化できる。(L = 低音調)



首里方言 (国立国語研究所 1963) では一類対応の動詞が複合動詞の先部成素の場合、その複合語は一類対応の単純動詞と同じ音調型になる (16a)。先部成素が二・三類対応の動詞の場合、後部成素の元の調値が複合動詞の音調を決定する。後部成素が一類対応動詞の場合、後部成素の元の下がり目が複合動詞全体の下がり目になる (16bii)。後部成素が平板型の二・三類対応動詞の場合、複合動詞の前語末拍に音調の下降が現れる (16bi)。

(16) a. ?nma「ri-kaajun	← ?nma「rijun「生まれる」	+ kawa「jun「変わる」
hui「-siti <sub>IN</sub>	← huju「 <sub>N</sub> 「振る」	+ siti「jun「捨てる」
b. i. 「?abii-?udurukasju」 <sub>N</sub>	← 「?abijun「叫ぶ」	+ 「?udurukasjun「驚かす」
「hui-?Nzasju」 <sub>N</sub>	← 「hujun「掘る」	+ 「?Nzasjun「出す」
「tui-keeju」 <sub>N</sub>	← 「tujun「取る」	+ 「keejun「返る」
「tui-mucun	← 「tujun「取る」	+ 「mucun「持つ」
ii. 「taci-haba」 <sub>kajun</sub>	← 「tacun「立つ」	+ 「haba」 <sub>kajun</sub> 「はだかる」
「tui-?aci」 <sub>kajun</sub>	← 「tujun「取る」	+ 「?aci」 <sub>kajun</sub> 「扱う」
「mii-?usi」 <sub>najun</sub>	← 「NNZun「見る」	+ 「?usi」 <sub>najun</sub> 「失う」



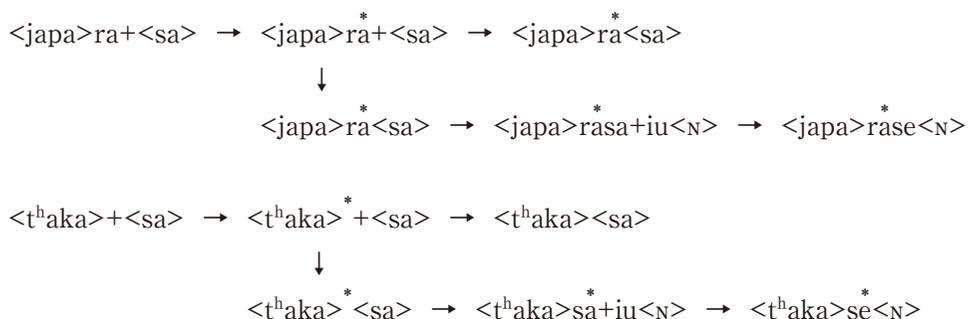
	[-ex] 形容詞		[ + e x ] 形容詞	
語幹	/ʔubu-/	/taka-/	/japara-/	/kak-i-ge-/
[1] 副詞形	ʔu[ʔbuu]ku	t <sup>h</sup> akaa[ku]	japaa[ra]ku	haci[gi]ku
[2] 名詞形	ʔu[ʔbuu]sa	t <sup>h</sup> akaa[sa]	japaa[ra]sa	haci[gi]sa <sup>26</sup>
[3] 理由形	ʔu[ʔbuu]sanu <sup>27</sup>	t <sup>h</sup> akaa[sa]nu	japaa[ra]saanu	
[5] 未然形	ʔu[ʔbuusaraa]ba	t <sup>h</sup> akaa[sa]raaba	japaa[ra]saaraba	haci[gi]saaraba
[6] 連体形 1	ʔu[ʔbuu]saru <sup>27</sup>	t <sup>h</sup> akaa[sa]ru		haci[gi]saaru
[7] 已然形 1	ʔu[ʔbuusarii]ba	t <sup>h</sup> akaa[sa]riiba	japaa[ra]saariba	haci[gi]saariba
[8] 已然形 2	ʔu[ʔbuusare]e	t <sup>h</sup> akaa[sa]ree	japaa[ra]saaree	haci[gi]saaree
[9] 連用形	ʔu[ʔbuusee-gise]N	t <sup>h</sup> akaa[se]e-gisen		haci[gi]see-nee
[10] 終止形	ʔu[ʔbuse]N	t <sup>h</sup> akaa[se]N	japaa[ra]sen	haci[gi]sen
[11] 連体形 2	ʔu[ʔbusee]nu	t <sup>h</sup> akaa[se]enu	japaa[ra]seenu	haci[gi]seenu
[12] ズの結び	ʔu[ʔbusee]ru	t <sup>h</sup> akaa[se]eru	japaa[ra]seeru	haci[gi]seeru
[13] カの結び	ʔu[ʔbusee]ra	t <sup>h</sup> akaa[se]era		haci[gi]seera
[14] 中止形	ʔu[ʔbuse]i	t <sup>h</sup> akaa[se]i	japaa[ra]sei	haci[gi]sei
[15] 準体形	ʔu[ʔbusee]si	t <sup>h</sup> akaa[se]esi	japaa[ra]seesi	haci[gi]seesi
[16] 尾略形	ʔu[ʔbuse]e	t <sup>h</sup> akaa[se]e		haci[gi]see
[17] 状態接続形	ʔu[ʔbusee]ti	t <sup>h</sup> akaa[se]eti		haci[gi]seeti
[20] 接続形	ʔu[ʔbuu]sati <sup>27</sup>	t <sup>h</sup> akaa[sa]ti		haci[gi]saati

この [±ex] とアクセントの位置の相関は、形容詞が複合動詞と同じようにアクセントが付与されていると仮定すれば説明できる。[-ex] 形容詞は単純動詞と同じようにアクセントが語末寄りに与えられ、そして [+ex] 形容詞は単語の中央部に一拍だけが高くなっている。複合語であるとすれば、形容詞語根 + -sa の複合であろう。

[+ex] 複合動詞ではアクセントは後部成素の一拍目に付与される。これをそっくりそのまま形容詞に適用するなら、-sa の成素にアクセントがあるはずである。だが、長い形容詞（例えば japaa[ra]sen）からわかるように、これは明らかに事実と異なる。-sa にアクセントが付与されないためには、-sa を韻律外にしなければならない。[+ex] 形容詞の t<sup>h</sup>akaa[sa] の場合、第一韻脚が韻律外であるのに加えて、最終拍の -sa も韻律外になっていることから、アクセントは付与されず、無アクセント語形となる。形容詞諸活用形の資料から、アクセントが後部成素に付与されなければ、先部成素の最終拍にそのアクセントが付与される。この事実から鑑みると、動詞の活用形の場合にもこれと同じ現象がなぜ生じないかが問題になる。つまり、[23] nu[kuu]t<sup>h</sup>amaati は無アクセントで、韻律外の語尾の直前の拍にアクセントがある \*nu[kuut<sup>h</sup>amaa]ti にならない。1 節では、この語形にア

アクセントが付与されないのは、動詞語尾が韻律外になっているためであると説明した。しかし、動詞語尾と形容詞形成辞 -sa（それに [+ex] 複合動詞）のアクセント付与との間には違いがある。動詞語尾は名詞と同様、アクセントはできるだけ単語の右端に近い位置に付与されるのに対して、形容詞と [+ex] 複合動詞ではアクセントは後部成素の左端に付与されるのである。この方向性の違いは決定的である。複合動詞と形容詞の場合、アクセントは後部成素の左端に付与されるが、そこに着地できなければ、同じ方向（左の方）に着地できるまで移動する。<sup>28</sup> 一方、単純動詞の場合はアクセントは活用語尾の右端に付与されるが、そこに結合できない場合は、同じ方向（右の方）にさらに進んでも、語末なので結合できる拍は存在しない。

形容詞の基本語幹は X-sa で、-sa は韻律外である。他の接尾する語尾（動詞語尾と同じもの）は循環的にこの語幹に付加する（たとえば、-sa + iu<sub>N</sub> → -se<sub>N</sub>）。<sup>29</sup> これは動詞と同じであって、このために [12], [15], [21], [22] にアクセントが複数存在する。t<sup>h</sup>akaa[se]<sub>N</sub>「高い」の場合、-sa は語末にないから韻律外ではなく、複合語アクセントが付与される。japaa[ra]se<sub>N</sub>「柔らかい」の場合、複合語アクセントは最初の循環に付与された位置に残留する — これは [+ex] 複合動詞と同じである。



今帰仁方言の形容詞のアクセントは複合動詞のアクセント付与規則によって付与され、[+ex] 形容詞のアクセントは、韻律外性が許すかぎり -sa の直前にあらわれる。他の北琉球方言の形容詞にも似た音調の分布が見られる。

那覇方言（内間・野原 2006）では、今帰仁方言の [+ex] 形容詞に対応する形容詞（金田一分類語彙表の二類相当形容詞）は -sa の前の音節に高声調が付与され（17a）、大宜味村田嘉里方言（ローレンス 2005：81）では高声調は二類相当の形容詞の形容詞形成語尾 -ha の前の拍に付与される（17b）。

- |         |      |                            |                             |
|---------|------|----------------------------|-----------------------------|
| (17) a. | 那覇方言 | 一類相当形容詞                    | 二類相当形容詞                     |
|         |      | [ʔacisa <sub>N</sub> 「厚い」] | ʔa[ci]sa <sub>N</sub> 「暑い」] |

「nzjoosan 「愛らしい」	ʔu[kaa]san 「危ない」
「ʔatarasan 「大切である」	naci[ka]san 「悲しい」

b. 田嘉里方言 一類相当形容詞	二類相当形容詞
「acihan 「厚い」	a[cihan 「暑い」
「suuzuuhan 「にぎやかである」	ukka[ahan 「危ない」
「attarahan 「大切である」	iki[rahan 「少ない」

徳之島浅間方言（上野 1977：27-29）で、今帰仁方言の [-ex] 形容詞に対応する一類相当の形容詞は高起式で語末音節は低く、二類相当の形容詞は語末音節（四拍語は語末拍）が高い（18）。

(18) 一類相当形容詞	二類相当形容詞
「haa]han 「赤い」	taaha[n 「高い」
「ʔacii]han 「厚い」	ʔacii[han 「暑い」
「ʔasjaa]han 「浅い」	kusjaa[han 「臭い」
「ʔattaraa]han 「惜しい」	sigjoroo[han 「冷たい」

だが、ここで注意を引くのは、形容詞形成語尾 -ha の前の拍の母音が長母音化していることである。この長母音の位置が過去の段階の音調の変わり目の位置に対応すると考えれば、二類相当の形容詞の高声調の位置は、今帰仁方言や那覇方言と同じように形容詞形成語尾の前の拍か音節にあったと考えられる。これは北琉球祖語にあった音調パターンであったであろう。浅間方言では、多数形である二類相当の形容詞の高声調の位置（形容詞形成語尾の前の拍か音節）が高起音調の一類相当の形容詞に広まり、その後二類相当の形容詞の高声調が語末音節に移動したようである。

今帰仁方言や那覇方言の形容詞の音調と浅間方言の形容詞の長母音の位置から、北琉球祖語の形容詞の音調は複合動詞の音調に準じたと考えられる。

#### 4. おわりに

今帰仁方言の単純名詞のアクセントの起源は Lawrence (2016)、そして副詞の音調の一つ（無アクセント）の起源はローレンス (2006) で論じた。本稿では今帰仁方言の用言のアクセントを概説し、[+ex] 複合動詞と形容詞のアクセントの位置は北琉球祖語の高声調が付与される位置と同じで、北琉球祖語の音調型は今帰仁方言に受け継がれていると論じた。単純動詞に関しては、一類対応動詞は北琉球祖語で高起式で二拍目に高声調が、二・

三類対応動詞は低起式で前語末拍に高声調があったと思われる。諸志方言は、語頭軽音節が低くなったが、これに近い状態である。諸志方言の一類対応動詞の二つの活用形において高音調は語末音節に拡散している。これは強調などのイントネーションがアクセントに転じたと思われる。このように諸志方言にある <sup>\*</sup>a と <sup>\*</sup>ee の存在から、今帰仁方言で語末後舌母音と前語末拍がアクセント付与の対象になるという一般化が生じたであろう。また、諸志方言の二・三類動詞は前語末拍にアクセントがあり、今帰仁方言ではこれは二・三類対応動詞より数が少ない一類対応動詞に広まったと推定できる。このように今帰仁方言の単純動詞の音調はかなりの変化を受けているが、同じ今帰仁村の諸志方言の資料により、その変化がどのように起きたか、またなぜ起きたかは見当がつく。

## 謝辞

方言形式に関して情報を下さった西岡敏氏、岡村隆博氏、仲原稔氏と「首里ことばの集い」の皆様にご心から感謝申し上げます。1989年12月に今帰仁方言を教えて下さった仲宗根政善先生、仲里源盛氏と山内光子氏はもう故人となったが、記してお礼を申し上げます。最後に、本誌の匿名の査読者から有益なコメントをいただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。

## 注

- <sup>1</sup> 語末拍が韻律外にならない複合名詞もあるが、後部成素が無アクセントか語末アクセントの二拍語に限られているようなので、有標である（ローレンス 1990：78-80）。
- <sup>2</sup> 小川（2012：95）は長母音化が複合語化の前に適用されるため、複合語の hitimi「ti」にアクセントは想定しない（一語にアクセントは一つまで）という分析を提案しているが、この分析では、(2)の例は <sup>\*</sup>p<sup>h</sup>aziciiseekuu, <sup>\*</sup>hitimitihucii という誤った形になる。他に mazi<sup>\*</sup> + jakuba<sup>\*</sup> → mazi「rijakuu」ba (<sup>\*</sup>maziriijakubaa) 「間切役場」の例もあり、かなりの生産性があることが判る。
- <sup>3</sup> 語末が低い声調の語形に二拍以上の助詞がつくとき、高声調が助詞の前語末拍まで拡散 (spread) する場合がある。ここでもアクセントと高声調の振舞いが異なる。名詞の二拍目にアクセントがあれば、高声調は拡散する (i) が、二拍目にアクセントのない高声調があるとき、その高声調は拡散しない (ii)。(NHJ = 『沖縄 今帰仁方言辞典』(仲宗根 1983))

- |  |   |
|--|---|
| (i) 「haa」ra /haara/ <sup>*</sup>   | 「haara-ne」le 「川に」(NHJ 384L)                   |
| (ii) $\begin{array}{c} \text{H} \\   \\ \text{「p}^{\text{h}}\text{anzi}^{\text{H}}\text{」li} / \text{panzi}^{\text{H}}\text{」} \end{array}$                          | 「p <sup>h</sup> anzi」li-nee 「はぜのきに」(NHJ 515R) |
| (iii) $\begin{array}{c} \text{H} \\   \\ \text{san}^{\text{H}}\text{「zinsoo}^{\text{H}}\text{」} / \text{san}^{\text{H}}\text{zinsoo}^{\text{H}}\text{」} \end{array}$ | san「zinsoo」o-nee 「易者に」(NHJ 343L)              |

(iv)  $\begin{array}{c} \text{H} \\ | \\ \text{soo}[\text{heikensame}]e / \text{sooheikensamee}^* / \text{soo}[\text{heikensame}]e\text{-nee} \end{array}$  「徴兵検査前に」  
(NHJ 157R)

4 ローレンス (2009) が提案した北琉球祖語の単純名詞の韻律構造の再建は主に徳之島浅間方言、与論島麦屋東方言および今帰仁方言に基づくものである。この再建は Lawrence (2016) で発表した今帰仁方言の名詞アクセントの分布を説明するために考案されたものである。

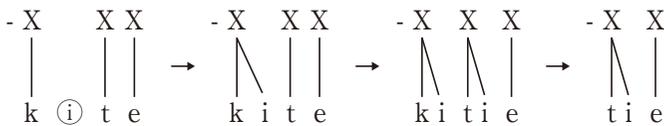
5 「 $[\text{?ac}]_{\text{cun}}$  「歩く」, 「 $[\text{?me}]_{\text{nSEN}}$  「いらっしやる」, 「 $[\text{?mo}]_{\text{lorun}}$  「いらっしやる」 の三語の諸活用形は終止形と同様、語頭拍のみが高い。

6 仲宗根 (1983 : 385; 1987 [1985] : 161) ではこの語形の /t/ は無気音になっているが、仲宗根 (1983 : 685; 1987 [1975] : 127, 129) では有気音になっている。今帰仁方言では、いくつかの外来語を除いて有気音は韻脚の頭子音の位置に限られる。 $[\text{?araat}^{\text{h}}\text{amirun}]$  「改める」と同じ韻律構造であることから、本稿では有気音の方を採用する。

7 NHJ (685) では [6]  $\text{nu}[\text{kuut}^{\text{h}}\text{amaa}]_{\text{ri}}$  とあるが、仲宗根政善先生のご教示によると、 $\text{nu}[\text{kuu}]_{\text{t}^{\text{h}}\text{amaa}}_{\text{ri}}$  もあるという。NHJ に $[\text{?u}]_{\text{jaa}}[\text{meeri}]$  「敬え」(672) の他に $[\text{?u}]_{\text{jaamee}}_{\text{ri}}$  (75L) があると同一ようなゆれである。高声調が拡散しない形の方が無標であると考えられる。

8 [12]  $\text{p}^{\text{h}}\text{a}[\text{taaracuraa}]$  「働きつついよう」が示すように、奇数音節でもアクセントをもった語末母音が長母音化する。

9 ①とは浮遊している /i/ のことで、これは独立した母音として現れないが、直前に口蓋化可能な子音があれば、その子音に連結して口蓋化を起こす。この口蓋化は後続する子音 (/t/) に移って、その後子音連続の最初の子音は削除される。例えば、-k で終る動詞語幹なら、接続形は次のように派生されると思われる。(なお、口蓋化された k も t もともに c として具現化される。)



10 Lawrence (1990 : 127) は [27] -iabin のアクセントは必ずしも前語末拍にあるのではないことを指摘している。正確には -iabin は複合動詞のアクセント付与プロセス (次節参照) によってアクセントが振られるが、[+ex] 動詞の場合は単純動詞と同じ音調型をとることもある。

11 [9] ~ [22] の語尾は -iur- という形態素を含む ([9] -iur-n, [10] -iur-nu など) であろう。

12 これに対して [3] 連体形 1 は一般の名詞を修飾できない。連体形 1 は拘束形式である形式名詞や助詞の前にあらわれる他に、nuuga 「どうして」と zoi 「とても」の結びと



sjataʔaa[zi, masjuʔaa[zi 対 sjo[iʔazii ~ sjo[iʔaa]zi (上野 2014: 145)

「砂糖味」 「塩味」 「醤油味」

<sup>20</sup> sittuba[sjun は菊・高橋 (2005: 245) にあり、sit[tubasjun は上野 (1999: 9) による。上野 (1999: 9, 111) は「sittubasjun という語頭から高い形も報告している。「kii-kurusjun 「切り殺す」など kii-「切り-」が先部成素や「kui-jabujun 「食い破る」など kui-「食い-」が先部成素の複合動詞にこの音調型がある他、「paki-zjasjun (菊・高橋 2005: 420L) ~ paki-[zjasjun (菊・高橋 2005: 418L)「吐き出す」や「jun-wasirjun (菊・高橋 2005: 630L) ~ jun-[waasirjun (菊・高橋 2005: 626)「言い忘れる」のように、(12b) の音調型とゆれる例もある。先部成素が二拍の場合にのみ現れる音調型である可能性がある。

<sup>21</sup> jun-[macigen は菊・高橋 (2005: 626) にあり、jun-maci[gen は菊・高橋 (2005: 52L) にある。

<sup>22</sup> 那覇方言の高起式動詞には全平のものと下降するものがあり、次の例が示すように、動詞の長さと言末音節の構造が下降の有無を決定するようである。

「hatakain 「必要以上に場所を取る」, 「hazimain 「始まる」, 「nukutamiin 「暖める」

「tatakaa[in 「戦う」, 「turukuu[in 「押し黙る」, 「nukutama[in 「暖まる」

<sup>23</sup> 首里方言の ʔii-cikunaasjun 「言いまくる、言い負かす」は ʔii[N 「言う」と ʔcikunaasjun 「しわくちゃにする、丸める」からなる複合動詞であると思われる。野原三義氏 (西岡敏氏への個人教示) によると、那覇方言の「ʔiiciku]naasun は ʔiici 「言って」と「kunaasun 「踏んづける、ばかにする」の連続であるというが、この分析の仕方では音調がはたして説明できるかは内間・野原 (2006) の資料からは不明である。筆者は「ʔiin 「言う」 + \*cikunaa[sun の複合動詞であると考えたい。

なお、現代首里方言では ʔcikunaasjun はもはや死語で、かろうじて ʔcikunaamuku ]naa 「くしゃくしゃ、もみくちゃ」という副詞の形で喧嘩時などに使用するという。

<sup>24</sup> 次のパラダイムを挙げることもできるが、nu[kuut<sup>h</sup>amaari-gi]sen は例外である。仲宗根政善先生のご教示によると、規則的な nu[kuut<sup>h</sup>amaari-gise]N も使われるという。

[-ex] 形容詞

ha[ci-gise]N 「欠きそう」

ʔa[gaari-gise]N 「上がりそう」

p<sup>h</sup>a[taaraci-gise]N 「働きそう」

nu[kuut<sup>h</sup>amaari-gi]sen 「温まりそう」

[+ex] 形容詞

haci[gi]sen 「書きそう」

sagaa[ri-gi]sen 「下がりそう」

haraama[ci-gi]sen 「巻きそう」

ʔaraat<sup>h</sup>a[miiri-gi]sen 「改まりそう」

<sup>25</sup> ʔu[buse]N 「重い」の諸活用形の音調は仲里源盛氏、japaa[ra]sen 「柔かい」は山内光子氏、t<sup>h</sup>akaa[se]N 「高い」は NHJ (646-51) で、haci[gi]sen 「書きそう」は NHJ (116-7) による。なお、japaa[ra]sen の活用形で、表から欠落しているものは、筆

者の調査で訊かなかったもので、規則どおりの語形があると思われる。

- <sup>26</sup> \*haci-<sup>g</sup>i<sup>l</sup>sa<sup>a</sup> 「書きそうな度合」が期待されるが、NHJ (116) にある haci-gi<sup>l</sup>sa<sup>a</sup> は -a 「物・者」という形態素を含む別語であろう。この語尾が付くと、すべてのアクセントや韻律外性の指定が消去され、無標の音調が生じる。

- <sup>27</sup> 
$$\begin{array}{c} \text{H} \\ | \\ \text{FCVCV}^* \end{array}$$
 この音調は [FCVCV] の語形に適用する規則によって前語末アクセントが削除される (Lawrence 1983 : 115-6)。動詞では ?a<sup>l</sup>gaaru<sup>n</sup> 「上がる」の [10] ?a<sup>l</sup>gaa<sup>l</sup>runu など [11], [14], [17], [18], [19] の活用形もこの音韻変化を受ける。

- <sup>28</sup> これは標準語の複合名詞のアクセント付与にもみられる現象である。後部成素が三拍以上の長い複合語の場合、複合語アクセントはその後部成素の初頭拍に付与される (例：オトシ-バ<sup>l</sup>ナシ)。語末拍は韻律外で、それを除いた後部成素が一韻脚 (二拍) より短ければその成素にアクセントは付与できない。この時 (つまり後部成素が一拍ないし二拍) の無標の場合、複合語アクセントはさらに左に移動して、先部成素の末尾拍に連結する (例：オトシ<sup>l</sup>-アナ)。この分析は藤村靖氏による (Poser 1984 : 140fn)。

- <sup>29</sup> ai の母音連続が ee になり、母音が三つ連続すれば、三つ目の母音が削除される。

## 参考文献

- 井上史雄・篠崎晃一・小林 隆・大西拓一郎 (編) 2001. 『日本列島方言叢書31 琉球方言考④ 奄美属島』 東京：ゆまに書房。
- 内間直仁・野原三義 2006. 『沖縄語辞典 — 那覇方言を中心に —』 東京：研究社。
- 上野善道 1977. 「徳之島浅間方言のアクセント(1)」岩手国語学会論集刊行会 (編) 『小松代融一教授退職・嶋稔教授退官記念国語学論集』 188-220 (1-33). [井上他 (2001) に再録]
- 上野善道 1999. 「与論島東区の用言のアクセント — 付 体言のアクセント資料 —」『東京大学言語学論集』 18 : 3-159.
- 上野善道 2001. 「徳之島浅間方言の活用形アクセント資料」『琉球の方言』 25 : 1-61.
- 上野善道 2004. 「徳之島浅間方言の複合動詞のアクセント」『琉球の方言』 28 : 1-42.
- 上野善道 2014. 「徳之島浅間方言のアクセント資料(1)」『国立国語研究所論集』 8 : 141-175.
- 小川晋史 2012. 『今帰仁方言アクセントの諸相』 東京：ココ出版。
- 生塩陸子 1985. 「沖縄伊江島方言の語アクセント」『沖縄文化研究』 11 : 17-94.
- 生塩陸子 2009. 『新版沖縄 伊江島方言辞典』 伊江村：伊江村教育委員会。
- 川上 蓁 1963. 「文末などの上昇調について」『国語研究』 16 : 25-46. (國學院大学国語研究会).
- 菊 千代・高橋俊三 2005. 『与論方言辞典』 東京：武蔵野書院。

- 国立国語研究所（編）1963.『沖縄語辞典』東京：大蔵省印刷局.
- 蔡 雅芸 1995.「東京語話者に見られる文末の「浮き上がり調」について — 「意志表現」と「勧誘表現」の場合 —」『東北大学文学部日本語学科論集』5：25-36.
- 島袋輝子 1975.「今帰仁諸志方言」琉球大学卒業論文（未公刊）.
- 仲宗根政善 1983.『沖縄 今帰仁方言辞典』東京：角川書店.
- 仲宗根政善 1987 [1975].「今帰仁方言概説」『琉球方言の研究』104-148. 東京：新泉社.
- 仲宗根政善 1987 [1985].「今帰仁方言について」『琉球方言の研究』149-162. 東京：新泉社.
- ローレンス・ウエイン 2005.「大宜味村田嘉里方言の音調体系」『琉球の方言』29：67-85.
- ローレンス・ウエイン 2006.「琉球祖語に遡る周辺的な音調型の一つ — 副詞の特殊音調 —」『琉球の方言』30：155-65.
- ローレンス・ウエイン 2009.「北琉球祖語の名詞音調 — 試論」『沖縄文化』106：1-17.
- ローレンス・ウエイン 2016.「徳之島浅間方言の名詞音調について二題 — 高起音調と指小語形の音調 —」『琉球の方言』40：1-17.
- Lawrence, Wayne P. 1990. *Nakijin phonology: Feet and extrametricality in a Japanese dialect*. 筑波大学博士論文 (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3072413>).
- Lawrence, Wayne P. 2001. "Tone and/or accent in Ryukyuan dialects," in S. Kaji (ed.) *Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena: Tonogenesis, Japanese Accentology, and Other Topics*. 195-204. ILCAA (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所).
- Lawrence, Wayne P. 2016. "Historical reanalysis in the Nakijin dialect noun accentuation system," *Cahiers de linguistique asie orientale* 45 : 1. 1-25.
- Poser, William J. 1984. *The phonetics and phonology of tone and intonation in Japanese*. Unpublished Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, MA.